第 11 回　ブックショートアワード

タイトル：ヨスロイトルと彩雲

著者名：亜古 鐘彦
文字数：4,749 文字

＜あらすじ＞

　陽太の祖父は最近妙な言葉を口にする。「ヨスロイトルトサイウンを知らんか？」聞き覚えのない言葉に不信感を抱き、困惑しながらも何のことなのか気になる。老いてしまった祖父の様子に気を落とす陽太だが、ふと見つけた思い出の中に、祖父が老いても忘れられない大切なものと鮮やかな雲を見つけた。

「お兄さん、ヨスロイトルトサイウンを知らんか？」
　実家のリビングで、僕は呆気に取られている。
「ヨスロイトルトサイウンじゃ。知らんか？」
「ん？何をって？ヨス…トルト？」
「ヨスロイトルトサイウンじゃ、ヨスロイトルトサイウン、お兄さん知らんか？」
　それのことを思い出そうとしているのか、目の横を掻くような動作をしながら再び尋ねられた。何度も何度も同じ言葉を繰り返すその奇妙さに、僕はたまらず言葉を遮った。
「じいちゃん、わかったから。あとで探そうよ。ね？そうだ、喉乾いたでしょ。麦茶飲もうよ、麦茶」
　じいちゃんをリビングの椅子に誘導して、そそくさと冷蔵庫から麦茶を出した。

　清じいちゃんは、恵子ばあちゃんが亡くなってから気を落として、あっという間に認知症になってしまった。80歳という年齢を思えば、なってもおかしくはないとみんな思っていたけど、歳の割に足腰もしっかりしていたじいちゃんがみるみる細くなり、話すこともちぐはぐになっていくのを見ていると、言いようのない無力さを感じざるを得ない。僕のことは孫だとは認識できなくなって、名前も忘れてしまった。そして、認知症になってしばらくすると、僕のことを"お兄さん"と呼ぶようになった。

　じいちゃんが飲み終えた麦茶のコップを台所に持っていくと、後ろから母さんの声がした。
「陽太、なんて答えたの？」
「なにが？」
「"ヨスロイトルトサイウン"よ。ちゃんと聞き取るのに、母さん100回くらい聞き直したんだから」
　母さんの口からはっきりと聞いても、やっぱり何のことだかさっぱりわからない。
「そう言ってたんだ。何のことかわかんなかったから、有耶無耶にして違う話したよ。てか、大丈夫なやつ？変なものじゃない？なんか変な…」

「母さんもわかんないのよ～。最近、急に言い出したんだけど、パパに聞いてみてもわかんないっていうし。お義父さん本が好きだったから、何かで読んだ一節とか、そういう類じゃないかとは言ってたけど…」

聞き覚えのない単語に不信感を持ちながら、母さんが言った言葉を反芻してみる。ヨスロイトルトサイウン。"ヨスロイトルト"は一旦置いといて、“サイウン”って、"彩雲"のことだろうか？実際には見たことはないけれど、写真や天気のニュースでなら見たことがある。たしか、そんなに珍しい現象でもなかった気がする。

スマホで検索してみると綺麗な写真と共に、おおまかな説明が出てきた。

“彩雲とは、太陽の近くを通りかかった雲が、虹のような色に美しく彩られて見える現象。現れることは珍しくないが、昔から幸せを呼び込む吉兆とされている ”

じいちゃんは、何か縁起を担ぎたいのかな？でも、じゃあ、“ヨスロイトルト”は何だ？

ヨスロイトルト　彩雲、検索。

ヨスロイトルト　縁起物、検索。

ヨスロイトルト　吉兆、検索。

それらしいヒットはなし。手掛かりが少なすぎて、調べようにも調べられない。でも、なんだかこのじいちゃんの探し物を、『認知症になったからよくわからないことを言っている』で片付けてはいけない気がする。

リビングの隣の和室で、僕がうんうん言いながらしかめっ面でスマホを見ていると、家事を片付けた母さんが入ってきた。

「うわっ陽太、びっくりした～。難しい顔して何してるの？眉間、しわになるよ」

「さっきのじいちゃんのやつ、いろいろ考えてみたけどわかんないなーって」

母さんは、お盆に乗せてきた自分のご褒美おやつを座卓に広げると、緑茶をすすって一服し始めた。

「ふぅ。ヨスロイトルトのやつねぇ」

「母さん、本当に何も思い当たるものない？認知症になったらさ、昔のことはよく覚えてるとかって言うじゃん。何か昔の思い出とかじゃないの？」

「ん〜昔のねえ。でも、お義母さんがいた頃はふたりで田舎にいたし、私たちが知らないことの可能性も全然あると思うなぁ…。クッキー食べる？」

こちらに差し出しつつ、ちょっとお高いクッキーをさくさくやりながら、母さんも眉間にしわを寄せてうーんと唸りだす。

「あ、そうだ！そういや、お義父さんの引っ越しの時、あっちの家にあったアルバムも少し持ってきたんだった！寂しくないように」

恵子ばあちゃんが亡くなってしまったタイミングで、母さんと父さんは、じいちゃんが独り暮らしになってしまうのは心配だからと、僕たちが住んでいる家へ引っ越さないかと提案した。はじめは「ここが慣れているから」の一点張りでじいちゃんも引かなかった。でも、独り起きて、独りご飯を食べ、独り本を読み、独り眠るという生活の心もとなさに堪えかねたじいちゃんは、後ろ髪を引かれつつも引っ越すことにした。程なくして元気を失くし、認知症になってしまった時は、引っ越させたのがいけなかったのかもと母さんも父さんも悩んでいた。家族みんなでいるのに、どこか寂しいような雰囲気が色濃く漂っていたのをよく覚えている。

母さんがリビングの棚の一番上から、だいぶ年季の入ったアルバムをいくつか取り出すと、ぱらぱらと開き始めた。そこに映るのは、親戚の叔母さんや叔父さんの姿、母さんたちの結婚式で賑やかにしているみんなの顔。

「いい写真だね。でも、あんまりじいちゃん写ってない」

「そうねえ…、あ！そうそう。そうよ、お義父さんって、もうちょっと若い頃は写真を趣味にしてたよ、たしか。この写真全部、お義父さんが撮ったんじゃない？ほら！この写真見て。お義父さんがカメラ構えてる」

じいちゃんがごてごてしたカメラのレンズを覗きながら、片手はピースのポーズにして古い写真に写っている。横には吹き出しで“写真家：清”と書いてある。大きなカメラの端からはみ出ているじいちゃんの笑った顔を見て、最近笑った顔見てないなぁと少し凹んだ。

「この字、お義母さんのだね。いつ見ても綺麗な字」

じいちゃんの写真をアルバムにまとめるのが、ばあちゃんの晩年の趣味だった。アルバムに整頓されている写真らは、プロのように上手いとは言えないかもしれないが、どれも写真の中に親密さや、楽しさを閉じ込めたような温もりを感じるものばかり。父さんが昼寝している写真。母さんとばあちゃんが正月に一緒におせちを作っている写真。ばあちゃんが庭の花を手入れしている写真。ばあちゃんがご近所さんたちと談笑している写真。ほとんどばあちゃんの写真集みたいになっている。

定年後、あちらこちらへ興味を向けるじいちゃんは、盆栽や水彩画、珈琲、美術館巡りエトセトラの趣味に熱を上げては、部屋の片づけも疎かになるほど夢中になっていた。それらの趣味の中で、最後に落ち着いたのが写真だったらしい。ばあちゃんはもちろん、あたりの風景や出掛けた先の珍しいものなどを撮り、親戚が集まった長期休暇には記念写真のチャンスを逃さず、嬉々としてカメラをセッティングして自慢げに笑っていた。「清じいちゃんの出番だ！」「早く早く～」「も～この人はまた新しいレンズ買って～」とみんな口々に意見するのが、集まった時の恒例のワンシーンになっていた。

それから、じいちゃんは撮った写真を、いつも一番にばあちゃんに見せて意見を聞いていた。ばあちゃんは写真のことはわからないからとつぶやきながらも、どの写真も「とってもいい」と返していた。本心かもしれないし、そう言うとじいちゃんが心底嬉しそうにするのが、ばあちゃんも嬉しかったのかもしれない。

ついつい、本来の目的を忘れて、へ～とかふふっとか言いながら、母さんとアルバムに夢中になってしまっている。

「じゃなくて、ヨスロイトルトサイウンだよ」

「はっはっは、そうだったね。いい写真だから母さんも見入っちゃった」

このアルバムの中に何かひとつでもヒントがあれば、探し物が見つかれば、じいちゃんも少しは元気になるかもしれない。いつの間にか必死になっている自分に驚きながらも、アルバムの隅から隅まで目を走らせた。

そして、３冊目のアルバムに手をかけた時、母さんが僕の肩を強めに叩いた。

「あれ？ねぇ、これサイウンじゃない？」

母さんが指差す先には、少しぼやけた虹色の雲の写真と、吹き出しで"彩雲・吉兆の雲"と書かれたページ。じいちゃんたちが住んでいた家の、懐かしいトタン屋根も写り込んでいる。

「えっ！！それじゃん！絶対！！」

そして、その左上にはもう一枚写真があった。部屋の中で、女性がカメラに向かって指を差している。

「あ、これお義父さんの書斎だよ。ほら実家のさ」

書斎の本棚には、ちょっとした本屋さんくらいびっしりと本が並べられている。難しい歴史小説、珈琲の歴史、世界の美術館、初心者向けカメラの基本、介護の基礎知識、よくわかる癌治療、在宅介護マニュアル。そこには、清じいちゃんを形作るあれこれの、ほんの一片が写っていた。そして中央に写っているこの女性には、母さんも僕も、もちろん見覚えがあった。少し若い頃の、恵子ばあちゃんだ。その写真の吹き出しにはこうあった。

“ようしろうとる！”

備後地方生まれのばあちゃんは、普段から方言で喋るため、標準語に慣れている家族や親戚には、どういう意味なのか分からないことも多かった。でもじいちゃんは、わかるように喋れとは言わなかった。いつも「恵子ちゃんらしくていいんだ」と笑っていた。“ようしろうとる”とは、備後弁で"たくさん散らかしている"というような意味。趣味に夢中になり過ぎたじいちゃんが、ばあちゃんによくそう注意されていたのを思い出した。

「恵子ばあちゃん、注意してるけど楽しそうだね」

「とっても楽しそう。だからお義父さん、この写真を探してたのかもね」

この写真と彩雲の写真には、同じ日付が印刷されている。毎日何かを忘れてしまうじいちゃんが、この日撮った大好きなばあちゃんの笑顔と彩雲だけは忘れずに、忘れられずにいたことが、僕は無性に嬉しかった。本当は、孫のことを「お兄さん」と呼ぶようになったじいちゃんが、僕の知っているじいちゃんじゃなくなっているように思えて怖かった。でも、そうじゃなかったから。

「相変わらず、じいちゃんはばあちゃんにベタ惚れだね」

　それから、もう一度その写真をじっくり見ながら、それを撮るじいちゃんの楽しそうな顔を想像した時、ふと気が付いた。
「…あっ！そういうことか」
「え？何が？」
　母さんへの返事もいい加減に、気持ちが急いた。
「ちょっと、じいちゃんに見せてくる！じいちゃーん、ようしろうとると彩雲あったよ！」

　日当たりのいい角部屋に駆け込むと、じいちゃんはいつものようにベッド横の椅子に座って外を眺めていた。柔らかい風が入り込む静かで穏やかなじいちゃんの部屋。その印象とは反対に、あたりにはじいちゃんの服や読みかけの本が散乱している。毎日母さんが片付けているけれど、気が付けばこの様相らしい。
「じいちゃん、じいちゃん。見てこれ、見つけたよ！」
　小さい子供がはしゃぐように、じいちゃんの元へ走ってきた自分に気付いて、今になって少しだけ恥ずかしい。
　僕の呼びかけにゆっくりと振り返るじいちゃんの手元へ、さっきのページを開いてアルバムを差し出す。じいちゃんは、しばらく顔を近づけたり遠ざけたりしてピントを合わせると、頬を緩ませて言った。
「…おぉ、おぉ、また恵子ちゃんに注意されとる。部屋を片付けんとな。せっかく吉兆の雲が出とるのにもったいないよと言われてしまう。こればっかりしとらんと、片付けなさいとな」
　“これ”と言った時、じいちゃんは目の横を掻くように、シャッターを切る仕草をした。
「そうだね。じゃあ片付け僕も手伝うよ」
「ありがとうなぁ、陽太」
　微笑んで写真を見つめたままそう言うじいちゃんの横顔を見ながら、上ずりそうな声を抑えて返事をした。いつ以来だろう。
　その時、後ろからずるずる聞こえると思ったら、母さんが僕より泣いていた。